

観るサプリ

円空仏の魅力



会 員 きた ぐち まさ あき
北 口 雅 章

私の事務所を初めて訪れた相談者の多くは、相談室（兼、会議室）に入った途端、「ギョッ！」とされるに違いない。部屋の左側にぎっしりと置かれた「木彫りの仏像群」（自称「立体曼荼羅」）が、否応なしに目に入ってしまうからだ。そして、大方は、「円空ですか。」と言いつつも、内心では「よくまあ、こんなに仰山集めたもんだな。レプリカを！」と冷笑されているに違いない。もっとも、円空ファンであれば言う筈だ。「それにしても、実によく本物に似せてますよねえ。」と。

実は昔、円空展で観た「円空仏」の微笑に魅せられて以来、私は大の円空ファンなのだ。ご存知の方も多いと思うが、円空（1632-1695年）は、江戸時代前期の修行僧で、所携の鉋一振で木彫りの仏像をつくりながら日本全国を巡錫（じゅんしゃく）し、独特の微笑みを含む造形を特徴とする「円空仏」を全国各地に残した仏師として知られる。円空は、生涯に約12万体の仏像を彫ったと推定されているが【註1】、実際に発見・確認されている円空作の神仏像の数は、平成25年9月現在で5379体といわれている【註2】。

仕事や読書に疲れ、何も考えられなくなったときは、円空仏の写真集【註3】や、円空仏を手にとってじっと見つめるに限る。信仰の対象（念持仏）ではないが、私にとっては、円空仏こそ、何よりの「観るサプリ」なのだ。



ただただ、じっくりと円空仏を観察すると、円空が、単なる仏師（職人）ではなく、偉大な宗教家にして、天才的な芸術家であることが感得できる。

「レプリカなら罰はあたるまい。」と思いつ

つ、古美術商等から円空仏の彫刻を買い集めていたら、「こっ、これは、ひょっとして、本物ではないか？」と確信させるに足る仏像を2躯ほど手に入れてしまった。このうち1躯は観世音菩薩像で、入れ物の木箱に墨書で「正真・円空作 本間正義」【註4】と書かれてある。そして、もう1躯は、私のお宝の「両面観音像」【註5】。いけない、いけない、梅原猛先生（哲学者、京都市立芸術大学名誉教授）【註6】に叱られそうだ。「そんなものを手にいれてなんだ。君は、なんと罰当たりな。きっと報いをうけるよ。」と。でも、いいんです。明治政府が行った廃仏毀釈政策の嵐の中を生き残った円空仏ですよ！私の手元で大切に保管させていただきますから。

それにしても、これら円空仏の微笑のお陰で、どれだけ心が慰められたことか。円空仏にご関心のある方は当事務所に遊びにおいでやす（拝顔料は徴収しませんから）。

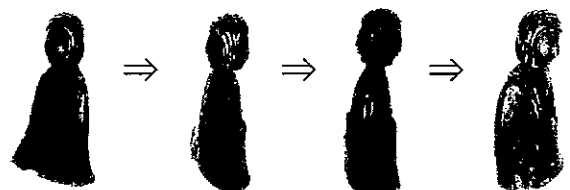
【註1】 12万體となると、1日10體を33年間継続して彫り続けないと出来ない数であるが、①「浄海雜記」（1844年、名古屋市中川区・荒子観音寺蔵）に、「（円空は）十二万ノ仏軀ヲ彫刻スル之大願ヲ発シ」とあり、②円空作「今上帝像」（岐阜県高山市上宝町・桂峯寺蔵）の背銘には「元祿三庚午九月廿六日…十マ仏作已」（十萬體作りおわる）との記事がある。

【註2】 小島梯次「円空仏入門」（まつお出版2014）

【註3】 長谷川公茂「円空 微笑みの謎」（中部出版・ビジュアル選書 2012）がお薦め。

【註4】 本間正義氏は、円空研究の第一人者（元大阪国立国際美術館長）であり、円空学会編集「円空研究」第1巻の巻頭論文「円空彫刻の特質」を寄せられている。

【註5】 両面観音像



（表面）を写真のとおり時計回りに回転させると…（裏面）にも

【註6】 梅原猛「歡喜する円空」（新潮社2006）参照。